

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年3月11日

3月を迎え、日ごとに春めいていく感じがします。

11年前の3月11日、東日本大震災が東北地方を襲いました。地震とその直後に発生した津波により、約1万6千人の方が亡くなり、行方不明者は現在でも2千5百人を超えています。東日本大震災は天災であると同時に人災でもありました。地震発生の1時間後に東京電力福島第一原発を15メートルの津波が襲い、原発1～5号機は全電源を失います。原子炉冷却が停止したことにより、1～3号機で炉心融解（メルトダウン）が発生し、大量の放射性物質が建屋外に放出される重大な原子力事故に発展しました。放射性物質は広範囲に拡散し、除染作業が進められてきましたが、事故発生から11年後の現在も福島県双葉町などの地域では住民の帰還が認められていません。

11年前というと、高校生でも当時はせいぜい小学校低学年、もしかしたら中学生の中には震災の記憶がないという人もいるかもしれません。社会全体をみても11年の歳月は確実に災害の記憶を遠のかせています。しかし、私たちには風化に抗し、震災がもたらした悲劇と教訓を未来に語り継ぐ義務があります。

本日14時46分、本校では東日本大震災の犠牲者への弔意表明として1分間の黙とうを行います。一人ひとりが震災の犠牲者を悼み、同時に震災の記憶を新たに作る機会としてほしいと思います。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まって約2週間が経ちます。プーチン露大統領は短期間の軍事行動によりウクライナ政権の打倒を目指したとされていますが、その当初の思惑ははずれた形です。一方でロシアは核戦力の使用を示唆（しき）し、ウクライナ国内の原子力施設への攻撃を実行しています。万が一、核兵器が使用されたり、原発が破壊され放射能が拡散された場合、その被害は地球規模になるおそれがあります。

ロシア軍の攻撃により亡くなった6歳の女の子の映像が世界に配信されています。女の子の遺体のそばで泣き崩れる母親の姿と、女の子の命を救えなかった医師が「この惨状をプーチンに見せてやれ！」と怒りをあらわにする様子が何度もニュース映像で流されました。

父親をキエフに残して鉄道で国外に避難しようとするウクライナの5～6歳の男の子の映像もありました。大きな目に涙をためながら「パパは英雄たちを助けるんだ」と気丈にカメラにむかって話す男の子は、次の瞬間には「でも、もしかしたらパパも戦うのかもしれない」と表情を曇らせます。男の子は、戦いの中で父親が死ぬかもしれないことを理解しています。人類はすべての叡智を集めて、この男の子の哀しみと祈りに応えなければなりません。

『ペスト』再読 人間の正義について

この文章は、茨城高校生徒会誌『轟（とどろき）』13号（令和4年3月1日発行）に寄稿したものです。中学生にも読んでもらいたいと思い、「校長室だより」でも配信します。

この文章を読んで興味をもった人がいたら、ぜひアルベール・カミュの書いた小説『ペスト』原作を読んでもらいたいと思っています。

2020年初夏、ふと立ち寄った書店で、新潮文庫の『ペスト』が平積みで置かれているのを見ました。『ペスト』は1947年に発表された、アルベール・カミュの二作めとなる小説です。近代の古典とも言える名著であることは確かですが、現代の人気作家の新刊本と肩をならべて書棚の一番目立つ場所に置かれていることにまず驚きました。ネットで調べてみると、新型コロナ感染拡大と重なるように『ペスト』の売れ行きが伸びていると書かれています。2020年4月にはアマゾンの書籍売れ行きランキング第4位を獲得し、15万部も増刷されているとのこと。ネットの記事には「新型コロナの予言に満ちた小説『ペスト』」などというものもあり、少し違和感を感じました。

自分が『ペスト』を読んだのは約40年前、高校2年の時だったと思います。入り組んだ構成や象徴的で暗喩が多用される言葉の解釈に苦労しながら、なんとか読み切った記憶があります。ペストは黒死病とも呼ばれ、特に中世ヨーロッパで大流行した伝染病です。致死率が非常に高く人々に恐れられてきました。小説『ペスト』は、ペストが発生し、感染拡大を防ぐため封鎖された街で、疫病の蔓延する中を生きる（あるいは死んでいく）人々の物語です。

40年前の記憶では、作品中の「ペスト」は伝染病そのものであると同時に、死や苦痛、抑圧など、人生におけるあらゆる悪や不条理のメタファー（暗喩）であり、『ペスト』は不条理に満ちた世界で人間はいかに生きることが可能かを描いた象徴的、寓意的な小説である、というふうに理解していました。それが、「新型コロナ」と『ペスト』が直接結びつけられることに違和感を感じた理由です。しかし、すでに自分の中で作品の詳細な記憶は失われており、なぜ社会が今『ペスト』を欲しているのかを知るためにも、もう一度作品を読んでみようと思いました。

『ペスト』の舞台はアルジェリアのオランという港湾都市です。物語は街のあちこちで鼠の死骸が発見されるという事件から始まります。ペストは、ペスト菌に感染した鼠からノミなどを媒介してヒトに伝染する病気です。鼠の死骸は日を追う毎に増えていきます。やがてオランでは高熱を発し頸部や鼠蹊部のリンパ線が腫れ上がる症状の病人が増え始め、彼らは身体中に斑点を生じさせて次々と死んでいきます。

当初、県や医師会はこの伝染性の熱病をペストと認めることに消極的でした。世論の不安をあおることを恐れ、「若干の予防的措置」を講ずるが脅威は阻止できる、という立場をとります。このあたりは、中国武漢で初めて新型コロナ感染症が確認された時に、中国

政府が徹底した情報統制を講じたことにより、市民や世界が感染のリスクについて知るタイミングが遅れた状況とよく似ています。

作品の中心的な人物である医師リウーは、熱病をペストと認めるかどうか、法的措置をとるかどうかではなく、市民の半数が死滅させられることを防止するかどうかが重要だと主張します。疫病による死者数の急増にともない、県はオランがペスト地区であることを宣言し、都市封鎖に踏み切るのです。

『ペスト』の序盤では、疫病の拡大を目の前にして、なお日常にしがみつこうとする市民たちが描かれています。「彼らは人間中心主義者であった。つまり天災などというものは信じなかったのである。天災というものは人間の尺度とは一致しない。したがって天災は非現実的なもの、やがて過ぎ去る悪夢だと考えられる」とカミュは書いています。

私たちは、約2年間にわたる新型コロナ感染症との戦いの中で、日常がもろくも崩れ去っていく経験を何度もしてきました。感染拡大第5波では、急激な感染者の増加により、医療機関が収容できずに自宅療養を行わざるを得なかった何人もの患者が亡くなりました。私たちがあたりまえのこととして生をゆだねている日常は、決して盤石ではないという事実を『ペスト』は鋭く突きつけています。

ペストによる都市封鎖の状況を、カミュは「追放」「流刑」と表現しています。小説中には、「追放」「流刑」の中で疫病とともに生きる様々な人物が描かれます。リウーは、病人たちを救う手立てがないことに苦悩しながら、感染拡大を防ぐため全力でペストに立ち向かう医師です。タルーは、ペストの猛威を前にした県の無為無策を目にし、リウーとともに志願者による保健隊を組織します。保健隊は感染地区の消毒や感染者の隔離、血清の製造などあらゆる感染防止活動を行っていきます。新聞記者のランベールは、パリに残した妻に会うため密かに街からの脱出を画策する人物です。そしていよいよ脱出がかなうという夜、彼は翻意し保健隊の仲間たちとともにペストとの戦いを続けることを選ぶのです。保健隊の事務仕事を引き受けつつ自作の詩の添削に没頭するグランや、疫病により全ての市民が平等な恐怖の中に置かれたことを歓迎するコタールなど、多くの人々が「ペスト」という運命の中で複雑に結びついていきます。

パヌルー神父は「博識かつ戦闘的なイエズス会士」です。祈祷週間のミサでの説教で、パヌルーは、ペストは神によってもたらされた禍いであると述べます。私たちが犯した罪に対して、神はペストという災禍をつかわすことで報い、その罪を償わせ、浄めることで、真理、善へと通ずる道を示そうとしている、それこそが神の慈悲なのだ、というのがパヌルー神父の長い説教の要旨です。

しかしその後、パヌルーは、ペストに感染した一人の少年が、長時間、激しい苦痛にさいなまれながら死んでいくさまを目の当たりにします。少年の痛ましい死をきっかけに、敬虔な神父パヌルーの中で何かが変化します。彼は保健隊の中心的存在としてペストとの戦いに身を投じていくのです。

少年が長時間の苦悶の末に息をひきとった直後の、パヌルーと、彼と一緒に少年に付き

添っていたリウーとのやりとりが描かれています。人間は、自分たちに理解できないことを愛さねばならない、というパヌルーに対して、リウーは激しくその言葉を否定します。

「僕は愛というものをもっと違ったふうに考えています。そうして、子どもたちが責めさ
いなまれるように作られたこんな世界を愛することなどは、死んでも肯（がえ）んじませ
ん」

キリスト教が、文化や生活、ものの考え方の中に深くしみこんでいるヨーロッパを日本人が正しく理解することは困難かもしれません。しかし、少なくともカミュは、長くヨーロッパ思想の中心に存在したキリスト教的な規範や価値観ではない別のところ、もっと現実の人間存在、生き、喜び、悲しむ人間そのものに近いところで、ものごとを考える立場をとろうとしているように思えます。

「われわれはいっしょに働いているんです。冒瀆（ぼうとく）や祈禱を超えてわれわれを結びつける何ものかのために」「僕が憎んでいるのは死と不幸です……あなたが望まれようと望まれまいと、われわれはいっしょになって、それを忍び、それと戦っているのです」これらは、いずれもパヌルーに向けられたリウーのことばです。神の存在、不在の問題を超えて、人間としての正義を求めようとすることばです。

リウーとともに、物語の重要な位置をしめる人物が、保健隊を組織したタルーです。タルーは、青年時代、検事である自分の父が重罪を犯した被告に死刑を宣告する裁判を傍聴し、自分が生きている社会は死刑宣告という基礎の上に成り立っていることに気づき、衝撃を受けます。そして、「直接にしろ間接にしろ、いい理由からにしろ悪い理由からにしろ、人を死なせたり、死なせることを正当化するいっさいのものを拒否しようと決心」するので

ペストとの戦いでくたくたになった一日の後、涼しい夜風の吹くテラスで、タルーとリウーが長い会話をします。リウーからの、心の平和に到達する道についてははっきりした考えがあるか、という質問に対して、タルーは「あるね。共感ということだ」と答えます。続けて「僕が心をひかれるのは、どうすれば聖者になれるかという問題だ」というタルーに、リウーは「だって、君は神を信じてないんだらう？」と尋ねます。タルーは答えます。「だからさ。人は神によらずして聖者になりうるか—これが、こんにち僕の知っている唯一の具体的な問題だ」

会話の後、二人は「友情の記念」として海水浴をします。描写としてはわずか2ページ足らずの、この夜の海水浴の場面には、不思議な詩情と美しさが存在します。

数ヶ月後、ペストは突然衰退に向かいます。病疫の収束と都市封鎖の解除への期待感が市民の心に高まる中、タルーがペストに仆（たお）れます。タルーは、リウーが見まもる中、「人力をこえた苦痛に焼かれ」ながら息絶えます。その死は、まるで一人の聖者の殉教の死であるかのように、重厚さと沈黙、ある種の荘厳ささえもたたえて描かれています。

「人は神によらずして聖者になりうるか」タルーのこの問いかけは、小説『ペスト』全体にはりめぐらされた問いです。

リウーやタルーが求めたものは、神への信仰のありなしにかかわらず、人間としての純粋な善意にもとづいた正義であり、連帯であり、反抗ではなかったかと思います。「ペス

ト」は人生の根源的な不条理の象徴です。罪無き少年やタルーが、地獄の業火のような苦痛にさいなまれた末に死ななければならなかった理由を説明できる人は誰もいません。しかし、私たちの生きる世界は、そんな不条理によって成り立っているのが現実です。

作者カミュは、不条理に満ちた運命の中、死や不幸や悪に反抗しながら、人間の中の善きものへの信頼を保ち続けようとする人の姿を描こうとしたのではないかと思います。それは、彼が生きた時代、ファシズムがヨーロッパを席卷し、暴力と抑圧が人々を覆いつくした時代と深く関係していることは間違いありません。

作品の最後にカミュは、ペストの収束と都市封鎖の解除を喜ぶ祝賀の花火の場面で、小説の語り手であるリウーをしてこう言わしめています。「そのとき医師リウーは、ここで終わりを告げるこの物語を書きつづろうと決心したのであった一黙して語らぬ人々の仲間にはいらぬために、これらペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、彼らに対して行われた非道と暴虐の、せめて思い出だけでも残しておくために、そして、天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも讃美すべきもののほうが多くあるということ、ただそうであるとだけいうために。」

あらためて『ペスト』を読み終えて、今なぜ『ペスト』が支持されているのかが少し理解できた気がしました。もちろん感染症をテーマとした作品である、という点はあるでしょう。しかし、それ以上に、ただならぬ災厄の中、他者のために、人間の善のために、自らの利害を度外視して行動する人たちへの共感こそ、この作品が再び注目をあびた理由ではないでしょうか。

感染が拡大していた時期、法令の定める労働時間をはるかに超過して、体力の限界を感じながら働くコロナ病棟の看護師を取材したニュース番組を見ました。母親でもある彼女は、万が一家族に感染させることを恐れ、愛する子どもたちとも離れて一人暮らしをしています。何度も仕事を辞めようか、と思い悩んだと言いますが、「自分が辞めたら、患者さんや仲間の医療従事者に迷惑をかける」という強い使命感で苦しい勤務を続けている、とインタビューに答えていました。

コロナ禍の影響で収入が減った母子家庭を対象に、無料でお弁当を配る活動をはじめた町のラーメン屋さんのニュースもありました。奥さんや家族と店を守ってきたという初老のご主人は、「お客が減って正直、店も厳しい。でも、自分たちよりもっと困っている人がいるのだから、自分たちがやれることで力になりたい」と語っていました。

アメリカに住むある黒人の女性は、両親をコロナで亡くし孤児となった2人の甥をひきとって育てています。シングルマザーとして自分自身の子ども4人を育てる彼女は、新たに2人の子どもをひきとるにあたって工場勤務のシフトを増やしました。「困っている人がいたら助け合うのがあたりまえ。アメリカで黒人が生きていくためには教育が必要。6人の子どもたちには全員、きちんと教育を受けさせたい」

リウーやタルーは、ここにもいます。

生徒会に依頼され、この文章を書いていた2021年の12月上旬、つけっぱなしになっていたテレビで、中村哲医師の没後2年にあたって、福岡のNGOが追悼行事を行った、というニュースを偶然目にしました。

中村哲さんは、パキスタンやアフガニスタンで約35年にわたり、人道支援、復興支援に尽力された医師です。医療の届かない地域に赴き、ハンセン病を中心に貧困層の診療にあたってきました。2000年、アフガニスタンに大干ばつが起こると、飢えや渇きに苦しむ人々のために井戸を掘る事業に着手し、その後、砂漠に用水路の建設を始めます。2019年、長年にわたるアフガニスタンへの貢献から、アフガニスタン政府から名誉市民を授与され、同じ年の12月4日、車で移動中に武装組織から銃撃を受け死亡しました。

西日本新聞のHP「中村哲医師特別サイト」には、中村さんのスナップ写真や肖像画とともに、「守れなくて申し訳ない」と下手くそな日本語で書かれた幕を掲げたアフガニスタンの人たちの写真が掲載されています。

1993年に出版された中村さんの著書『アフガニスタンの診療所から』（ちくま文庫）には、中村さんが、戦乱や国際情勢に翻弄され、先進国の身勝手な「国際協力」に憤り、イスラムの人々へのリスペクトと理解を絶やさず、自らの信念にもとづき、信頼できる人々と連帯しながら支援を行っていく様子が書かれています。

その中から、中村さんの人柄をよく表していると思える文章を引用します。パキスタンのペシャワールで「らい根絶計画」に参加し、支援活動を開始した時期について書かれた文章です。

「らいの仕事にたずさわる者は、その愛憎、醜悪さと気高さ、深さと軽薄さ、怒り、哀しみ、喜び、およそあらゆる人間的事象に、極端な形で直面させられる。人間を数字やプランだけではあつかえぬ何ものか、経済効率優先でおきざりにされてはならぬ何ものかが、らい治療にたずさわってきた人々の心の奥に根をおろしているからである。医療が人間を対象とするものであるかぎり、私自身は彼らの頑迷と偏屈に親近感をおぼえている。」

中村さんもまた、人間の中の善きものへの信頼を失わず、それを体現することを自らの生き方とした方なのだと思います。

今回、40年ぶりに『ペスト』を読んでみて、自分でも驚いたのは、高校時代に読んだ作品の印象が、全くといっていいほど実際の作品とは異なっていたことです。前述しましたが、自分の中で『ペスト』は、ペストに象徴される悪や不条理の中で人間はどのように存在しうるか、人間とは何ものか、という哲学的思量のうえに成り立つ作品である、というふうに記憶していました。

「人間のなかには軽蔑すべきものよりも讚美すべきもののほうが多くある」というメッセージが記憶の中から見事に削除されていたのは、自分の読解力の貧弱さによるところもあったかもしれません。しかし、何よりも、まだ反抗期を脱し切れていなかった高校2年生の自分が、正義や善意、信頼などといったものに対して斜めに構えて、無意識のうちにそれらを素直に受け入れることを拒んでいたからではないか、と今ふりかえてみて思います。

『ペスト』を再読する中で、一つ思い出したことがあります。それは、高校時代に自分が『ペスト』を読んだのは冬だった、ということです。当時、片道50分かけてバス通学をしていた自分は、バスの中で過ごす時間をもっぱら読書にあてていました。今回『ペスト』を読み進める中で、バスの木の床に塗られたワックスの匂いや、ディーゼルエンジン

のうなる音、よどんだ暖房の空気とともに、『ペスト』の読後感に圧倒されながら、外気に冷えた窓ガラスに額をあてて、こんなに緻密で壮大な構想の作品をいつか自分も書いてみたい、とぼんやり考えていた記憶がよみがえってきました。

自分にとって小説『ペスト』の再読は、懐かしい旧い友人と思いがけず再会した時のような、豊かな時間を過ごす経験となりました。

注) 現在では、「らい」は差別的な意味合いををふくむことから「ハンセン病」と表現されることが多い言葉です。中村哲著『アフガニスタンの診療所から』からは、そのままの表現を引用しました。